

『都市の美観と建築』(趣味叢書 第1篇)

黒田朋信 [著]

趣味叢書発行所刊 / 1914年2月 / 19cm / 250頁 / 図書番号OB-0004

黒田朋信（筆名：鵬心、1885—1967）は、東京帝国大学文科大学哲学科を卒業し、読売新聞社に入社。退社後、雑誌『美術週報』、『建築画報』の編集に携わった。戦後は、東京家政大学教授を務めた。本書は、著者が1910～13年に書いた、建築物に関する批評、感想等を集めたものである。

本書に序文を寄せた伊東忠太（建築家、東京帝国大学教授）は、真の建築の進歩は対社会的でなければ意味がない。進歩を図るには、まず世間に建築趣味を普及させなければならない。そのためには、多くの実例を挙げてその説明的評論を下し、世の人々に建築の何物たるかを充分会得させなければならないと述べ、著者がその役割を担うであろうことを期待している。

「帝都の美観と建築」は、東京朝日新聞に連載されたものである。著者はその執筆目的を、建築に対する常識の発達と趣味の普及とを計り、以て都市の美観を高めることにあるとしている。まず、銀座の明治屋と日本橋の丸善について、その材料、構造、様式等を説明し、苦言を呈しつつも、この2店ともに世の進歩に対応した建築専門家に設計を依頼したことを賞賛している。また、上野～京橋間の建築物の印象をも記している。

著者は、都市の美観を形成するものとして、大建築と小建築を比較し、大建築のような華美さはないが、その数の多さ故に、都市全体の調子は小建築からできことが多いと見る。また、概して独立して建てられる大建築に反し、一群となって建てられる小建築は、都市全体との調和と共に、その一群中の調和もまた重要であると説いている。

続く「建築の東京」は、読売新聞に連載されたものである。歌舞伎座、白木屋呉服店、三越、早稲田大学恩賜記念館といった単独の建築に対する批評の他、新橋、本郷、数寄屋橋、大手町、京橋の周辺地域の建築を瞥見した感想が書かれている。

「新建築印象記」は、雑誌『美術新報』に連載されたものである。その執筆目的は、素人たる一般読者に対して新建築を紹介することであるとしている。そして、萬世橋停車場、慶應義塾記念図書館、東京帝国大学正門、東京俱楽部、三井貸営業所、泰文社、日本赤十字社本社、東京美術学校本館、中央停車場（東京駅）、愛国生命保険株式会社、生命保険会社協会、村井銀行本店を取り上げ、その材料、構造、様式、間取り、装飾、建物の立地等を説明し、各建築の印象を述べている。

この他に、余篇として、新聞や雑誌に単発で発表された論稿が8本纏められている。帝國劇場などの建築批評の他、著者が建築に対する考え方を述べた「建築批評の標準」等が収録されている。

著者は、建築とは美術の一種類であり、他の美術と比べてより多くの科学的方面と実用的方面を有するので、その2つと美的方面との調和が重要であるとする。その上で、建築を鑑賞し批評する標準として、①国民性、時代精神、個人性が建築にあらわれているか、②材料上、構造上に偽りはないか、③実用上の目的に適っているか、④美か醜かを材料美・内容美・形式美の3種の美から見る、の4点を挙げている。そして、これらは互いに関係しているので、実際には一つを犠牲として他を助ける場合が多いが、理想としてはすべてが同時に成立すべきであるとしている。

（山野辺香葉・市政専門図書館司書主任）